福祉大学における国語力を基礎とした初年次演習の試み

○尾関友佳子・野畑友恵・新藤照夫(非会員)・麻生雅樹(非会員)
(福岡医療福祉大学人間社会福祉学部)

キーワード: 項目反応理論, 初年次演習, 日本語能力

An Investigation Report on Reading and Writing Ability in Japanese in Freshman Seminar

Yukako OZEKI, Tomoe NOBATA, Teruo SHINDO[#] and Masaki ASO[#]

(Fukuoka University of Health and Social Welfare)

Key words: Item Response Theory, Freshman Seminar, Reading and Writing Ability

目 的

福祉専門職養成をかけた本学のカリキュラムは資格取得を意識して構成されている。とくに国家試験関連講座は専門用語が多用されているので、教科書を読んで理解することが難しい学生もいる。近年多くの大学で導入されている初年次教育の一環としての基礎演習は、本校は通年科目として開講されている。前期こそ新入生のための教科書にそった授業がなされるものの、専門教育への橋渡しとして基礎演習をとらえる教員は、個々の学生の学習経験よりも専門的知識の教授に専心しがちになる。これにより、基礎演習による高校から大学教育へのスムーズな移行がなされず、授業についていけない学生の留年・退学を招来してしまうことになる。

上級生になっても、各実習先で学生はコミュニケーションの不味さや、読み書きといった基礎的な学習能力の低さを、実習指導者から改めて厳しく指摘されることになる。

基礎演習は、授業目標が多岐にわたるために、教育効果の指標が確立されていない。日本語能力基礎調査(英語運用能力評価協会)を入学直後に実施した1年生を対象に、敬語に焦点を当てた共通の学習目標を掲げた結果、学年末の敬語の得点が有意に高くなった(加知・尾関, 2009)。このことより初年次教育において教授側が的を絞った学習経験をさせると効果的であることが示唆された。

本報告では、日本語基礎能力調査を用いて新入生の国語力を診断するとともに、項目反応理論を用いて本調査の構造を確認する。

方 法

被調査者 21年度1年生(120名)、22年度1年生(177名、ただし分析対象は71名;臨床福祉心理学科のみ)であった。
日本語基礎能力調査 基礎演習担当教員(総合社会福祉学科の社会福祉・医療福祉コース所属)が、本学学生の日本語の基礎的な能力を診断し、その結果を教育にいかすことを目的にして作製したものである(梅埜・陶山, 2009)。4つの大問「漢字の読み書き(小問37)」、「言葉の意味(小問24)」、「話し言葉、敬語(小問30)」、「手紙の書き方(小問9)」計100小問からなる。

手続き 21年度学生に対して21年度基礎演習の最終講義日に、総合社会福祉学科は演習単位、臨床福祉心理学科は学科単位で調査した。回答時間は50分であった。22年度学生に対しては新入生オリエンテーション期間中に、大講義室にて集団試行した。回答時間は40分であった。採点は基礎演習担当者がおこなった。有効分析対象者は191名であった。

分析方法

母数の推定には Easy Estimation(熊谷, 2009)を使用した。

結 果

基礎統計量 表1に正答率を示した。漢字の読み、同音異義語を選択肢から選ぶ、同意語・反意語、四字熟語、ことわざを選択するなどの正答率は高かった。これらとは対照的に、

カナを漢字に直したり同音異義語を漢字に直したりすることや、話し言葉(言い回し、敬語)とくに日常会話の敬語表現の誤りを正す問題は正答率が低かった。平均より1標準偏差以上下回った学生は28名であった。

表1 大問毎の正答率

全体	64.3
漢字の読み書き	69.9
フリガナを書く	70.7
フリガナを書く	85.1
漢字を書く	52.1
同音語2択	84.0
同音異義語の漢字を書く	36.2
言葉の意味	77.5
同意語・反意語3択	76.6
四字熟語語群選択	94.5
言い回し4択	47.6
ことわざ語群選択	86.3
話し言葉／敬語	48.0
誤り表現下線	38.4
言い方を正す	45.8
言い方を正す	30.1
敬語4択	69.4
手紙の書き方	
手紙の構成	59.9

項目反応理論による分析

平均が0.1以下及び0.9以下の項目を削除して、テトラコリック相関行列による因子分析をおこなった結果、1因子構造が確認された。2母数ロジスティックモデルにおいて識別力、困難度を求めた結果、識別力(0.46)は中程度であった。困難度(-0.51)から本テストは学力の低い者に対して精度が高かった。テスト情報曲線のピーク(-1.20)からも、本テストは、学力の低い学生に有効である。推定尺度値とテストの総得点との相関係数は $r=.98$ となり、モデルとデータの適合はよかった。

考 察

新入生の日本語の基礎的な能力を診断するために調査した結果、能力の低い学生に対する有効性が示された。さらに、15%程度の低得点学生が存在することがわかった。本年度は基礎演習第1回目の授業で大問正答率をフィードバックし、個人にふりかえりをうながした。今後、調査の結果を、学生がこれから始まる大学生活の勉学に対する適正な動機づけとするような方略を考える必要がある。

引用文献

- 加知ひろ子・尾関友佳子(2009). 初年次教育の実践と他科目への関連 第51回日本教育心理学会大会発表論文集, 569
熊谷龍一(2009). 初学者向けの項目反応理論分析プログラム EasyEstimation シリーズの開発 日本テスト学会誌, 5, 107-118
梅埜國夫・陶山りか(2009) 日本語基礎能力調査(非公開)